

# ITを活用したコロナ禍での合唱活動

燕友合唱団指揮者 青木 雅美

## 要旨

- ・コロナ禍で合唱団はとりわけ大きな不自由を強いられている
- ・感染リスクを避けて活動するにはITの活用が有効である
- ・現状が数年続くと想定した活動を計画・実施する必要がある

## 1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大はあらゆる音楽活動に大きな影響を与えている。中でも合唱は政府から名指しで批判されたり、公共施設の使用が禁じられるなど、大きな逆風にさらされている。

この状況で合唱団を運営する方々はみな苦勞をしている。また、合唱団員ひとりひとりもどのように「合唱活動」をすればいいのか悩んでいる。

本稿では筆者が参加している「燕友合唱団」の取り組みを紹介する。また私自身が「合唱人」として開始した「ひとり合唱」も紹介する。読者の音楽活動、合唱活動の参考になれば幸いである。

## 2. コロナ禍中に実施した取り組み

燕友合唱団は社会人による男声合唱団であり、年齢は30代から70代まで幅広い。2020年に演奏会を予定していたがコロナ禍で2021年に延期、それも延期となり実施のメドは立っていない。隔週で活動していたが、2020年2月を最後に顔を合わせての正式な練習(集合練習)はできていない。

そんな中、試行・実行した練習形態を集合練習に近いものから順に挙げる。各練習形態の名称は燕友合唱団がつけたもので、世間一般に認められた用語ではない。

- |               |                             |
|---------------|-----------------------------|
| ① 集合練習試行      | メンバーがひとつの会場に集合して練習する        |
| ② 橋の下練習       | メンバーが橋の下に集合して練習する           |
| ★ ③ ネット練習     | 会議システムの無料ソフト「ZOOM」を用いて練習する  |
| ④ SYNCROOM 練習 | ヤマハの無料ソフト「SYNCROOM」を用いて練習する |
| ★ ⑤ リモート合唱    | 各自が自宅で録音し、それを集めて合唱にする       |
| ★ ⑥ ひとり合唱     | ⑤をさらに進めて、全パートを自分の声だけで作る     |

本稿では3つ(★印)を紹介する。いずれもITを活用するものである。

## 3. IT活用例その1 ネット練習

会議システムソフト「ZOOM」を用いての練習である。団員は自宅から参加する。練習だけでなくミーティングや飲み会、お茶会もZOOMで行っている。

以前はこうしたシステムを家庭で使用するのにはハードルが高かったが ZOOM は使いやすい。当団でも 1 回目は子や孫に手伝ってもらった者が多かったが、2 回目からは自分で参加できている。

ZOOM は互いの顔が見え、練習時間の前後は自由に会話ができる。そのため、2021 年末に 1 年ぶりにリアルに顔を合わせたときも「久しぶり」感は全くなかった。

一方で ZOOM は合唱練習ツールとしては不十分な点も多い。

- (1) 1 秒以上の遅延が発生する
- (2) 大勢で同時に歌うと 3 人分の声しか届かない
- (3) 二分音符など同じ音を長く歌うと音量が自動で減衰してしまう

(1) の原因の多くは Windows の音声処理の遅さにあり、他の会議システムアプリでも解消できない。また (2) と (3) は会議アプリである ZOOM にとっては「長所」であり、それを合唱練習に使うことに無理があるといわざるを得ない。

この 3 点から「ZOOM でリアルタイムに合唱することはできない」という結論が得られる。

したがって、燕友合唱団は ZOOM を利用して次のように練習を行っている。

- ・一般メンバーはマイクをオフ(ミュート)にする
- ・指揮者はミュートせず、声を発して練習の指示をする。必要に応じて、あらかじめ作成した電子音を流したり、ピアノを弾いたりして練習をリードする

メンバーは指揮者の指示に合わせて歌うことができ、注意点なども聞くことができるが、自分の声は誰にも届かず、メンバーの歌声も自分には届かない。これは「合唱」とは言い難く、当団ではこれを「合同自主トレ」と説明している。すなわち、「集まれる日が来るまでみんな家で練習しておいてね」という自主トレーニングと本質的には同じである。ただ、それではなかなかモチベーションが上がらず、実行も難しい。ZOOM で日時を決めてみんなで一緒にやることで実行も容易になるし、練習の質も上がる。逆にそこまでがこの練習形態の限界である。

## 4. IT 活用例その2 リモート合唱

各自が自パートを自宅で歌って録音し、それを集めてひとつの合唱にするものである。団員はガイド音源を自宅のパソコンやスマホにダウンロードし、それに合わせて歌い、それを録音してアップロードする。それを団内の IT 担当者が集めてひとつにする。団員にとっては自分の声が合唱となるので大きなモチベーシ

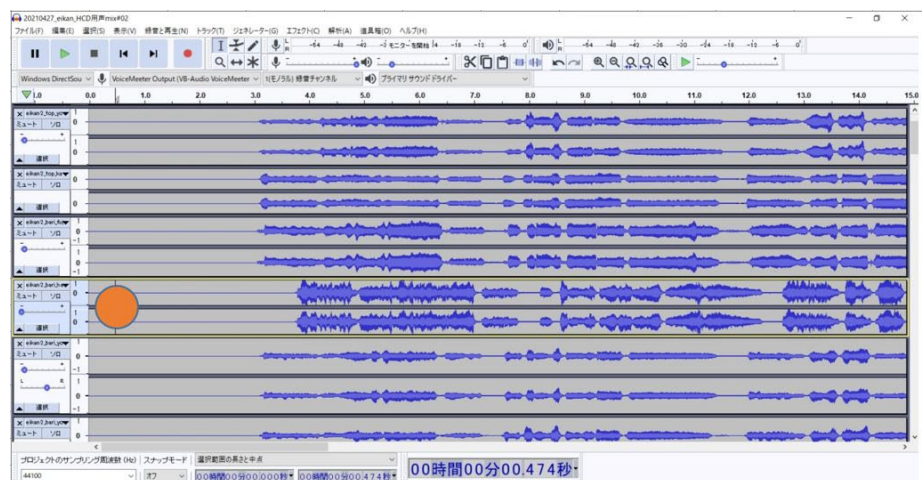


図1:多重録音ソフト「Audacity」。○印の声がずれており調整を行う

ョンになる。後日録音するとなれば、ネット練習にも熱がはいる。

また、この方式では、録音した自分の歌声を自分で聴くことになる。これは普段の練習では得られない「試練」で、たいがい「自分の下手さ」にガックリすることになる。それを受け入れた上で、自分で練習・録音を繰り返すことで、実力の向上につながる。録音した歌声は特定の団員が編集を行う。多重録音という操作になる。以前は高価な専用機が必要だったが、現在はパソコンでできる。燕友合唱団では無料のソフト「Audacity」を用いている。

これで「合唱」は出来上がる。これで完成としてもよいが、当団では動画に仕上げている。メンバーが ZOOM で歌っている動画や歌詞テロップなどを加えてひとつの作品としているのだ。動画編集もパソコンでできる。当団では「AviUtl」という無料ソフトを使用している。

そしてこの動画を YouTube で公開している。2021 年には 2 曲を公開した。下記 URL をクリックすることで実際に見る/聴くことができる。

栄冠は君に輝く [https://youtu.be/vIqq\\_pS\\_Fl0](https://youtu.be/vIqq_pS_Fl0)

きよしこの夜 <https://youtu.be/xkxxX3BEErk>

この 2 曲はコロナ禍に入ってから練習を始めた。初めてリアルに集まって歌ったのは動画公開より後のことである。燕友合唱団はリモート合唱を「ネット練習の成果」という目的で行っているのですが、このような選曲になっているが、合唱団によっては、愛唱歌などすでに歌える曲を選び、練習なしでいきなりリモート合唱することも考えられる。

このように時代の寵児ともいえるリモート合唱だが、作成にはふたつのハードルがある。

まず全団員にある程度の IT リテラシーが要求される。求められる能力は

- ・ガイド音ファイルをパソコンにダウンロードする
- ・自分の歌声を録音する
- ・録音したファイルを指定の場所にアップロードする

である。かなり苦労したメンバーもあり、他メンバーや家族のフォローで全員が声をアップロードできた。そして団の中に多重録音ソフトや動画編集ソフトを使いこなせる人が必要だ。当団には当初、そのような人はひとりもいなかったが、これを機に学習し、3 名が分担で編集を行えるようになっていく。

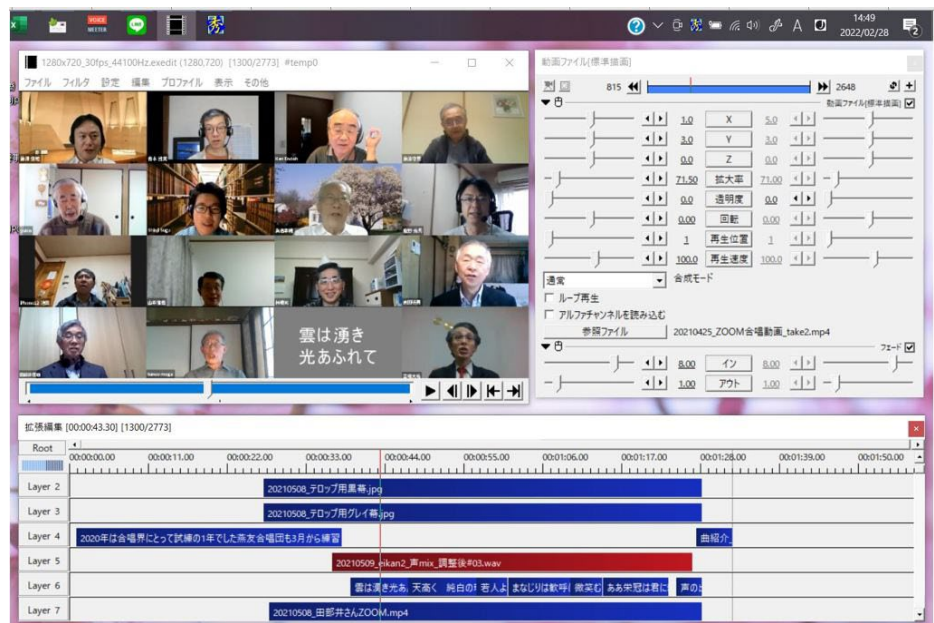


図2:動画編集ソフト「Aviutl」画面。「栄冠は君に輝く」の歌い出しを編集集中

## 5. IT 活用例その3 ひとり合唱

リモート合唱では本来の自分のパートだけでなく、他のパートも歌って録音することが可能である。同声合唱なら全パートを歌うことも可能だ。これをさらに一步進めて、自分の声だけで合唱を作るのが「ひとり合唱」だ。

全パートを自分で歌うのはもちろんだが、選曲から音楽作り、問題点の指摘もすべて自分で行う。通常の合唱活動では、合唱団員は、団が決めた曲を団が決めた日に団の決めた場所に行って歌う。音楽作りも指揮者に委ねられる。しかし、ひとり合唱ではそのすべてを自分で行う。いわばひとり合唱「団」である。

必要なハード、ソフトはリモート合唱と変わらない。ZOOM ができる環境があれば追加コストなしで始められる。2021 年、私はひとり合唱を始め、ソロ付き男声合唱曲の YouTube を公開した。ただしソロは入っていない。いわば男声合唱ソロのカラオケである。下記 URL をクリックすることで実際に視聴することができる。

雨 <https://youtu.be/Pntm4-TTheQ->

雪中越冬 <https://youtu.be/SfLKfM8MWcE>

※ソロを歌っているバージョンも公開している

ひとり合唱のよいところは以下の点である。

- ・すべてを自分で決めて作り上げることができる
- ・品質をとことん追求できる
- ・声質が揃う
- ・カルテットから大合唱まで可能
- ・各パートの役割を深く理解できる。

実現にはもちろん困難もある。多重録音、動画編集、YouTube 公開にはリモート合唱の項で説明したような IT スキルがいるし、アルトやバリトンの難しい音程はソプラノやベースの人には壁となる。逆も然りである。

最大の困難は広い音域を歌わなければならないことだ。特に混声合唱では「性差を越える」ことが求められる。Audacity では録音した声をオクターブ上下させることができるので、一応ひとりで混声合唱を作ることはできる。しかしテノールの声をオクターブ上げてもソプラノの声にはならない。ここには「オクターブ上げてソプラノになるような声を出す」という、従来の合唱とは次元の異なる技法が必要となる。私はまだそこには踏み込めていない。



図3: Youtube ひとり合唱チャンネルの動画

以上、IT を活用した合唱活動を 3 種類紹介した。すべてに共通する特徴としては

- ・パソコンとイヤホンとインターネット契約があれば始められる
- ・人と顔を合わせないので感染リスクはない
- ・従来の集合練習を再現できるわけではない
- ・動画を公開する場合は著作権、肖像権、版権の考慮が必要

といった点が挙げられる。

## 6. 合唱活動の今後 ～収束しないコロナ禍の中で～

当初は数か月で収束すると思われていたコロナ禍だが、2年経ってもその兆候はない。「早く収束してまた集まって歌える日が来て欲しいなあ」とは誰しも願っているが、それまで何もしないでいると、さらに数年を無為に過ごすことになりかねない。

合唱団には、この状態があと数年続くことを想定した活動計画が求められる。また個人レベルでも「コロナ禍の合唱人」としての人生設計が求められる。

燕友合唱団は月3回の練習方針を継続することにした。集合練習2回+ネット練習1回であり、集合練習ができない時期はネット練習2回とする。これによりコロナ前と同じ練習ペースを維持し、集合練習に参加できないメンバーもネット練習に参加できる。そして、自団体の演奏会は当面断念することにした。代わりに地域の合唱イベントに参加し、さらにリモート合唱を毎年2曲作成していくことにした。運営方針の大転換である。

私自身は「ひとり合唱チャンネル」を拡充する。昨年からはじめた「君もソロが歌える」シリーズの新曲を発表する。時間が許せば新シリーズも始めたい。また、筆者は高校時代の同期で立ち上げた合唱団でも活動しており、そちら関連の曲も公開していきたい。混声合唱団なので前述の「性差を越える」挑戦が必要となる。あるいは女声パートを歌ってくれる女性パートナーを得て「ふたり合唱」とする手もある。

説明を割愛した SYNCROOM 練習についても簡単に紹介したい。ヤマハの無料ソフト「SYNCROOM」を用いる。団員は自宅パソコンから参加する。ZOOM 練習と似ているが、互いの顔が見えない代わりに、ほぼリアルタイムに合唱ができる。燕友合唱団では数回の実験の上で正式利用を見送ったが、以下を満たすグループにはお勧めする。

- ・5名以下の少人数
- ・各自多少の出費(0円～約1万円)を容認できる、または Mac OS のパソコンを使用している
- ・ZOOM よりやや高度なパソコン設定作業ができる

このようにコロナ禍で「従来の形の合唱活動」が困難であっても「新しい形の合唱活動」は目の前に広がっている。多くの合唱団、合唱人が、縮こまることなく、従来の枠にとらわれることなく、それぞれの特徴に応じた合唱活動を進めていくことを願っている。

### 参考 URL

燕友合唱団チャンネル <https://www.youtube.com/channel/UC6uYMiZb70rZyB-WxMUKmbg>

橋マニアのひとり合唱チャンネル <https://www.youtube.com/channel/UC2rrHjEPgnhG2HzG2IWWhhRA>